

新編
新編
新編

新編
新編
新編

と

世

世

世

世

世

世

世

世

鑑賞と批評

* 吉田精一著作集

16

桜楓社

吉田精一著作集 第十六卷

鑑賞と批評

昭和五十五年十月十二日 第一刷発行

定価 二四〇〇円

著者 吉田 精一

発行者 及川 篤二

発行所 (株) 桜楓社

東京都千代田区猿樂町二一八一―一三
電話東京03二九五―八七七―一(代表)
振替東京六一八〇二〇郵便番号一〇一

© 吉田精一 一九八〇年

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替え致します。

吉田精一著作集 第十六卷 目次

I 鑑賞と批評

一 方法と理論……………7

1 文学史の方法 7

——ブレハノフについて——

2 言語と文学 27

——言語過程説と文学——

二 古典和歌と物語について……………43

1 万葉集の頽唐美 43

2 物語様式の本質 61

三 近代文学の評論と鑑賞……………83

1 短歌・俳句・私小説 83

2 近代小説の解釈 96

——芥川龍之介の作品について——

四 近代詩の問題……………147

1 近代詩の論理 147

——詩論を中心に——

2 創造と発見 168

——詩の表現と本質——

Ⅱ 批評の方法

一 文学研究の態度……………183

——なかにし君の拙著に対する批評に答う——

二 詩と批評……………190

三 詩……………193

*

第十六卷 鑑賞と批評 あとがき

217

解説 長谷川泉

219

I 鑑賞と批評

一 方法と理論

1 文学史の方法

——プレハフについて——

十九世紀における精神科学は、自然科学の異常な躍進に刺激されてか、体系化の傾向がきわめて強い。社会学におけるコムト、芸術学におけるテエヌ、経済学におけるマルクス、さては心理学におけるフロイト等——。恐らくはそれらの諸科学が、それぞれの範疇内の対象に働く論理的法則性を反省し、そこから自己の方法を規定して、理論的基底の上に体系を組織しようとする要求に立ったからでもあるうか。かくて経験科学はそれ自体の領域内において科学の科学性を吟味し反省する方法論を含むことを要請されるに至った。個性的、非合理的なものを対象とする歴史的科学にも、歴史的因果律ともいふべき一定の法則性を見出そうとする傾向を生じたのである。

自然科学の中でも、とくに精神科学に大きな影響をあたえたのは、ダーウィンの進化論であつた。それは我々が問題にしようとする文芸史学において言えば、テエヌの芸術哲学の根本的思想をきづいたのであるが、さらに彼を反駁し、否定したブリュンチエールの体系にも深い影響を及ぼした。マルクスについても、「論

理的にはマルクスの研究はダーウィンの研究が終る所からはじまる」(「プレハノフ「史的元論」」)といわれ、あるいは「マルクス主義は社会科学に適用されたダーウィニズムである」とされ、また「マルクス主義はダーウィニズムの唯一の科学的適用である」(ともに同書)とも誇られるのである。

勿論マルクスによって樹立された唯物史観は、進化論の啓示によってのみ成ったのではない。ヘゲル哲学がまたそれに劣らぬ深い感化をあたえている。すでにテエヌがこの両者の間に生れた子であった。マルクスもまたその意味ではテエヌと同じ時代の子であった(テエヌはマルクスにも影響したといわれる)。ヘゲルの歴史哲学は、第一に種々な歴史現象の交互の作用の根拠に、時代精神というイデオがあってそれが統一していると考えた。第二に各々の歴史的時代は、それぞれ特殊な原理もしくは法則をもつとした。第三に、歴史を支配する原理は、個人の意識から独立に働くと考えた。これをそのままとり入れ、イデオにかえるに経済的構造を以てしたのがマルクスの唯物史観だといえよう。マルクスはヘゲルを顛倒させたけれども、その歴史哲学を貫く発展段階的イデオロギイは、そのままヘゲルからうけついただけと見ることが出来る。

唯物史観から派生し、プレハノフによって基礎を置かれた文学史観が、生産力にもとづくところの発展段階思想を中心としているのはここに云うまでもない。私は今プレハノフの文学史方法論について考えて見ようとするのであるが、この派の芸術学者は、私の管見に入った主なものだけでも、マーツア、メーリング、ハウゼンスタイン、ルナチャルスキイ、フリイチエ、ルカーチ等がある。しかし私があえてプレハノフを選ぶ理由は、第一には何といっても彼がこの方面の鼻祖であり、また以上あげた諸家はルカーチをのぞけば、造型美学は別として、少くとも文芸学の方面においてはプレハノフに及ばないと思うからである。第二には、周知のように唯物史観は、方法論を具体的把握のうちに織りこむことを旨とし、方法論をそれとして精しく

述べることはない。マルクス、エンゲルス等においても方法の詳論は見られぬと云われるのであるが、芸術学者中ではまずブレハノフにおいて、それだけを切り離してではないまでも、最も概説的な叙述が見られると思うからである。勿論ブレハノフ以後、この立場の文芸学も相当の進展を見たのであるが、その方向については彼の示す基本線に沿うものであるに相違なく、彼の方法を論じることが今日にあっても意義をもたぬことはあるまいと思う。

問題を扱う態度について一言したい。私は文学史家の一人として、文学史の重要な幾つかの問題の範囲において批判的解説をしようとするのである。私は唯物史観に深く通じている者ではなく、ことに経済学の知識については常識以下である。この方面の浅い教養をもちながら、唯物弁証法に貫かれる文学史の方法を論じることは、あるいは非難に価しよう。しかし私の目から見れば文学史は一個の科学である。それは特定の領域をもち、自己の方法によって対象を把握するものである。唯物史観に立つ文学史といえども、この範囲においてその性格を判定し、その具体的成果を通じて批判することは、不可能でもなく、又無益なことではあるまい。今次の大戦前における世界の学界を見渡すと、フランスはランソンよりモルネ、アザアル等の線をたどる実証的科学的方法が主位を占めているごとくであり、ドイツではエルマティンガーやチザルツやシュトリッヒやの、モルフォロギイの性格を主とする文芸学が盛んであった。私の寡聞のいたす所であるが、ブレハノフの方向は、それらの学風にあつてはほとんど問題とされず、正面から批判したものを知らない。しかし我が国の国文学者間ではとみにこの学風が強くなり、注目すべき業績もあるもののようである。かつまた文芸史学に興味をもつ者として、私自身非常に啓発されるところのあつたブレハノフを顧みないわけには行かない。無知を冒して筆をとる所以であるが、恐らく理解不足から来る誤謬も多からうし、大方の示教

を得て、蒙を啓くを得れば幸いである。

ただ断つて置かねばならぬのは、私はこれに関する文献をほとんど全部邦訳で読んでいることである。そのためにも意外のあやまりをしている点がないとは云えない。ロシア物の翻訳は、好訳にめぐまれているとはいえず、屢々難解で意味不明の所があったり、伏字の爲め意味のとりにくい所もあったりする。それから又ブレハノフの主なものを読んでいると信じるが、全集を読破しているわけではないから、案外重大な読み落しをしている懼れもあるのである。

ブレハノフの芸術論の一般的方法を一言で云えば「物質的社會の發展の反映としての一定の藝術の發生・發展・滅亡の法則、いいかえれば芸術發展の弁証法を明らかにする」ことにある。

ブレハノフはマルクスおよびエンゲルスの説を要約して、歴史發展の方式を次のように描く（マルクス主義の根本問題）。

- 1 生産力の状態 der Stand der Produktionskräfte
- 2 前者によって制約された經濟關係 die dadurch bedingten Wirtschafts-verhältnisse
- 3 經濟的「基礎」の上に發生した社会的政治的秩序 die sozial-politische Ordnung; die auf der ökonomischen "Basis" entstanden ist
- 4 一部は直接に經濟により、一部は經濟の上に發生した社会的——政治的秩序により決定された社会的人間の心理 die teils unmittelbar durch die Ökonomie und teils durch die darauf entstandene sozial politische Ordnung bestimmte Psychologie des gesellschaftlichen Menschen

5 この心理を反映する諸種の精神的文化 *verschiedene Ideologien, die Eigenschaften dieser Psychologie widerspiegeln*

この(1)の生産力と(2)の経済諸関係との間に不調和が昂進して、時代の発展を形成する。すなわちこれらの諸関係が生産力の将来の進展を阻害し、この為に社会的発展の革命時代が生じる。老朽した生産関係は、旧の社会制度に対してのみならず、旧制度の基礎に成長した観念、感情その他一般の心理に対して、国民を批評的態度に立たせるというのである。

ここで附言せねばならぬのは、エンゲルスの晩年の手紙(一八九〇、ジョセフ・ブロッホあて)の中に見える次のことばであろう。——「物質的生活の生産および再生産は、最後において、歴史の決定的契機なのである。マルクスと私とは決してそれ以上を主張しなかった。この命題を、経済的契機は唯一の決定的なものであるという様に歪曲する時、ひとはこの命題をば、意味のない、抽象的な、荒唐無稽な文句に転形する。」——芸術は最後に経済的な諸条件によって決定されるというだけではナンセンスである。ワグナーのオペラ、ゾラのルーゴン・マッカール、クールベエの絵などは、ひとしく資本主義の産物だ、というだけでは、荒唐無稽にひとしい。芸術という微妙なものを分析するには、もっと複雑微妙な手続きが必要だ、とフランスのマルクス主義文芸学者、イコウイチはエンゲルスのことばを敷衍して云う(『唯物史観より見たる文学』)。プレハノフはこの複雑な結びつきを知っていたればこそ、一見煩瑣なこの方式を設定したのであろう。

この方式はすでに「公式」として有名なものであるが、プレハノフはこれによって「歴史的発展の形式をことごとく包括するに足りるものである」と断じ、また「それは同時に、諸種の社会力の相互作用以外に論

及することなく、かつこれらの力の相互作用の事実は未だ決してその発生の問題を解決するものでないことに想到せぬ所の折衷主義とは相距ること遠きものである。我々の方式は一元論的であり、唯物論を貫くものである。」と誇っている。

彼の云う「社会力の相互作用の事実」の限界内にとどまり、発生にまで遡ろうとしない「折衷主義」を文芸史学にもとめれば、彼の立場以外のすべてのもの、あるいは彼以前において最も一元論に近い立場をとろうとしたテエヌなども、その内に属せしめるであらう。

まことにこの考え方は一義的な原因結果を求める点において徹底している。しかし「折衷主義」と難ぜられる文学史家は、これに対してどう答えるであらうか。恐らくその把持する文芸理論の立場に従って、その答えには相違があるであらうが、たとえばもっとも実証的に事実に着し、文芸を社会と結びつけつつもあらゆる公式を否定するランソンのような「科学的」文学史家は次のように答えるのではあるまいか。——我々は具体的な作品に出发しその周囲を明らかにすることによって、相対的に認識された関聯を絶対的な全体性の代りに求め、一義的な原因結果でなく、ただ可能的条件を究明するにとどめる。この可能的条件を解明することにより、さらに進んで事実そのものの正しい、周到な解明を究竟の課題とする所に、文学史の、あるいは広く歴史の立場があるとする。我々にあつては、直接には事実としての唯一無二の歴史上の個性の現実的、個別的な研究こそ、文学史の目的である。さらに個性と個性との関聯を通じて歴史の中にある多様性と不規則性を明らかにし、理論的に処理し得る可能的条件のほかに、理論的に分析し得ない非合理的要素を発見することが、むしろ歴史の、とくに文学史の課題であらう。プレハノフのように（彼と雖もこれらの可能条件を否定するのではなく、その奥に更に根本的な要因をみとめるのだが）、絶対的、究竟的な意味における原因をつきとめ

るには、我々から見て学問上危険な、推^ス理^リの連^レ鎖^ソを必要とするであらう。それは実証的でなく、また科学的ではない。そのような危険を冒してまで絶対究竟の意味の原因をつきとめることを、必ずしも学問の目標とはせぬ。——こう彼等は答えるのではあるまいか。

恐らくこれらの文学史家の立場からは、プレハノフの「歴史的発展の方式」——それが唯物史観の中核をなす思想であるが——の科学的真理性を何によって証明するか、とつめよることが可能であらう。プレハノフはそれに対して、歴史の事実が証明すると答える以外にはあるまい。しかしその為には彼の方式は単なる解釈であつてはならない。「決して研究の出発点ではなく、その終局論的産物である」べきである。「それらは自然および人類史の上に適用されるのではなく、むしろ自然および人類史から抽出されるのである。自然や人類世界が諸原理に従うのではなく、むしろ諸原理はそれらが自然および歴史と一致する限りにおいて正しいのである」(エンゲルス、「反デューリング論」)べきであらう。それならば厳密には、世界史の事実に対する実証的研究が当然先立ち、その真理の絶対性を保証しなければならない。もしそうでなければそれは一種の仮定^{アポリア}か、それともアプリオリに研究者に先取されている信念にすぎないかといひ得る。周知の通り、マックス・ウェーバーは資本主義が唯物史観のいうように経済的な契機それ自体の展開として生まれたのではなく、また資本主義の精神も経済的諸条件の反映でもなければ、上部構造として生成したのでもないことを、「経験的」に実証し、人間の歴史を究極的に決定する動因は経済的闘争であるとするテーゼは経験科学的に正確に立証も反対もできないといっているのである(プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神)。

さてそれならば、文学史の中心目的の一つである個々の作品および作家を判断し評価する作業に当たり、プレハノフはどのような態度をもってこの方式を適用したか。

その製作においては想 アインビルディングスケラフト 像 力という論理を越えるものに出発し、その価値判断においても観 アンシャラフ 照と

いう非理論的体験、具体的直観を根底とせざるを得ない芸術作品を対象として行われる批評や研究が、いかなる程度にまで理論的に処理し得るかは、この学問に従事する者にとって非常な問題である。個々の作品をあまりにも客観的合理的にわり切ろうとすれば、それは芸術あるいは文芸に特有な性質を消失して、文芸の研究以外のものになり終る懼れがある。アリストテレスの詩学以来、文芸批評の客観的規程が探求されては来た。古典的な批評規程はポアロオによって立てられはした。しかしそれらはいうにおよばず、科学的批評を樹立して近代的批評の祖となったサント・ブーヴも、彼を追って一層科学的性格を徹底せしめようとしたテエヌでさえも、その作品評価に当たっては科学的合理的方法にある制限を置かざるを得なかった。ブリュンチエール以降のフランス文学者や、ドイツ文芸学の徒はあくまで文芸の文芸性に即した組織をもとうとする。

ここにブレハノフは、自からの方法を在来の哲學的美学を排した科学的美学に立脚するものとして、その芸術評価の方法の科学性、客観性を強調する（「芸術と社会生活」）。その方法として彼の主張する所は、第一に作品の社会的等 エキヴァレント 価を発見することである（二十年間「序文」）。それはいいかえれば、芸術作品の思想を芸術のことばから社会学のことばに翻訳することである。一定の芸術様式はその時代の社会の生産様式に必ずずるのみならず、その生産目的も、享受の仕方、価値評価の尺度も、社会的（階級）意識によって決定されるものであり、その時代における相対立する階級は、それぞれの階級の見解と観念を導き入れる。されば作品の科学的批評の第一段とは、そのうちに社会的（階級）意識の、いかなる方面が表現されているかを明らかにする事を行うのである。